

三代続く本物の酪農経営



小原 春美（おはら・はるみ）
大分県速見郡山香町

< 推薦理由 >

本県の酪農・乳業界を取り巻く情勢は、生乳の一元出荷と効率販売、生産者団体の機能強化を図ることを目的として、平成12年4月より関東ブロックと同時に広域指定生乳生産者団体・九州生乳販売農業協同組合連合会が発足した。九州各県の乳価の平準化に伴い本県の乳価の下落は避けてとおれないものとなってしまった。

このようななか、今回推薦する小原春美氏（53歳）は、大分県内でも一戸当たりの飼養頭数（65.5頭/戸）並びに飼養戸数の多い地域である山香町に生まれ、昭和38年に中学を卒業後、すぐに就農した。就農後、5年目には父が当時ではめずらしい青色申告を開始、本人も一緒に決算に取り組んだことが、今現在の小原牧場の基礎となっている。

昭和59年には大分県農業賞の優秀賞や九州酪農青年婦人酪農経営発表大会で優秀賞を受賞するなど確実に経営の成果を収めている。

飼養規模も昭和54年に近代化資金で増築し、40頭まで増頭、その後20年間で2倍の規模となっている。その間全て自己資金で対応してきた。一方増頭にみあう分の自給飼料生産にも力を入れている。経産牛1頭当たりの飼料生産延べ面積も29aを確保しており、国の提唱する循環型農業を実践しながらも、現在の経産牛1頭当たりの産乳量も9,500kgと高い水準になっている。この高い技術レベルは、昭和52年当初より牛群検定事業にいち早く取り組み、熱心に努力してこられた成果でもある。その後、平成8年長男の就農と同じくして山香町の家族経営協定に家族4人で調印をして、労働報酬や就労条件の協定も行い今日に至っている。このすばらしい経営体が本年中には法人化へ向けて家族で検討されており必ず法人化されるものと確信をしている。

また、若いながらも地域の農家に人望があるため、本年より山香町酪農組合の組合長として活躍をされている小原氏を推薦する。

(大分県審査委員会委員長 岩倉 哲雄)

< 発表事例の内容 >

1 経営管理技術や特色ある取り組み

本県では、フリーストール、ミルクングパーラー方式の大規模経営体が全体の20%近くを占めるような状況の中で、この経営体は自給飼料生産を主とする循環型農業を実践している県内でもトップの経営内容・規模を誇るつなぎ方式の牧場である。

第一に父が昭和43年より自分の経営を確実に把握するために、青色申告に取り組んだ。本人も昭和40年に就農し、青色申告のために一緒に決算に取り組んだ。このことは、今でも小原牧場をしっかりと支えており、現在の規模まで拡大ができた基盤となっている。それも、大半を自己資金で賄うことができ、12年期末の借入金残高が45万しかない点はその裏付けと言える。家族労働3人で年間所得を30,763千円の高収益をあげているすばらしい経営体である。

第二に父が昭和32年に開始して以来、大きく分けて5期にわたって規模を拡大しており、その間建設した牛舎等を大事に現在も使用し償却費を抑えている。また、自己資金であるために投資を非常に安く抑え、自分達で行える事は全てやってきた。

第三にはこの規模拡大の中で、牛群検定による牛群管理で昭和52年当初より事業に参画し、牛の繁殖、個体能力を把握し、今は25kg/日を下る牛は淘汰対象としている。10年前(平成3年)経産牛1頭当たり平均産乳量が7,000kg、5年後の平成8年には8,000kg、10年には8,500kg、12年には9,500kgと着実に乳量を伸ばしている。

第四にはこの高泌乳牛を自給飼料主体で飼養管理しており、経産牛1頭当たり飼料延べ面積を29a所有しており、現在では、省力作業のできるロールサイレージの通年サイレージ体系を確立している。国が提唱している安全で環境に優しい自給型のモデル的な本物の酪農経営である。無論飼料給与は通年サイレージを基本としたTMR給与で現在の生産力を維持している。

2 経営・活動の内容

1) 労働力の構成

(平成13年7月現在)

区 分	続 柄	年 齢	農業従事日数		備 考
				うち畜産部門	
家 族	本 人	53	300	300	
	妻	52	300	300	
	長 男	28	300	300	後継者
	嫁	26			
	孫	4			
	孫	2			
	孫	0			
常 雇	な し				
臨時雇	のべ人日		54日	54日	主な作業内容 搾乳・飼料給与
労働力 計	4 人		954日	954日	

2) 収入等の状況

(平成12年1月～12月)

区 分	種 類 品目名	作付面積 飼養規模	販売量	販売額・ 収入額	収 入 構成比	概ねの 所得率
農業収入	酪 農	80頭	760,296kg	85,127千円	100.0%	34%
農外収入						
合 計			760,296kg	85,127千円	100.0%	34%

3) 土地所有と利用状況

(単位：a)

区 分		実 面 積		畜産利用地 面 積	備 考
			うち借地		
個 別 利 用 地	耕 地	田	220		190
		畑	960	300	960
		樹園地			
		計	1,180	300	1,150
	耕 地 以 外	牧草地			
		野草地			
		計			
		畜舎・運動場	20		
	そ の 他	山 林	300		
		原 野			
計		300			
共同利用地					

4) 家畜の飼養状況

(単位：頭)

品 種 区 分	経産牛	育成牛	子 牛
期 首	80	23	
期 末	81	28	
平 均	79.9	26.7	

5) 施設等の所有・利用状況

種類	構造 資材 形式能力	棟数 面積数量 台数	取得		所有 区分	備考 (利用状況等)
			年	金額(円)		
畜舎	畜舎1	木造	70m ²	S.42	400,000	個人
	増改築1	鉄骨	200m ²	S.54	6,460,000	個人
	育成舎	鉄骨	100m ²	S.59	1,940,000	個人
	増改築2	鉄骨	400m ²	H.2	8,000,000	個人
	乾乳舎	鉄骨	200m ²	H.8	2,000,000	個人
施設	飼料庫	鉄骨	50m ²	S.48	500,000	個人
	サイロ		2基	S.54	1,095,000	個人
	サイロ		1基	S.55	695,000	個人
	倉庫	鉄骨	170m ²	S.55	3,550,000	個人
	サイロ		2基	S.56	2,000,000	個人
	倉庫増築	鉄骨	37m ²	S.58	480,000	個人
	車庫	鉄骨	90m ²	S.62	650,000	個人
	尿溜 堆肥盤	コンクリート	32m ³ 900m ³	H.2 H.12	450,000 6,300,000	個人 個人
機械	トラクター	M F 165	1台	S.55	1,857,000	個人
	ロータリー	コバシーKA	1台	S.55	356,000	個人
	フロントローダー	マイディローダー	1台	S.55	391,500	個人
	バキュームカー	タカキタ	1台	S.55	233,760	個人
	トラクター	M F 165	1台	S.58	2,830,000	個人
	テッピングワゴン	スター2t	1台	S.59	650,000	個人
	バルククーラー	3800L	1台	S.60	3,502,000	個人
	ブロードキャスタ	ピコン600L	1台	S.61	400,000	個人
	大型扇風機	1500	1台	S.62	170,000	個人
	キャビントラクター	M F 3060	1台	S.62	6,600,000	個人
	フォークリフト	トヨタ2t	1台	H.1	320,000	個人
	ダンプ	4WD 2t	1台	H.1	440,000	個人
	ロールベラー	クラス	1台	H.1	706,880	個人
	パイプミルカー	フルウッド	1台	H.2	3,141,500	個人
	バークリーナー		1台	H.2	2,060,000	個人
	ユンボ	三菱	1台	H.3	721,000	個人
	ラッピングマシン	M F 7550	1台	H.3	1,400,000	個人
	ロータリー	コバシー	1台	H.3	930,000	個人
	ラッピンググローブ	3060用	1台	H.3	350,000	個人
	軽トラック	ホンダ660	1台	H.4	1,050,000	個人
ダンプ2t	イスズ2t	1台	H.4	750,000	個人	

種 類	構 造 資 材 形式能力	棟 数 面積数量 台 数	取 得		所 有 区 分	備 考 (利用状況等)		
			年	金額(円)				
機	トラクター	ジョンディア2650	1	台	H. 7	3,510,000	個人	
	細霧システム	C S 7 1 1	1	台	H. 8	1,163,880	個人	
	真空ポンプ	アンバサ	1	台	H. 9	840,735	個人	
	飼料攪拌機	ストリティ	1	台	H.10	3,339,000	個人	
	モアコンディショナー	クーンFC240D	1	台	H.10	1,386,000	個人	
	ジャイロテッター	G R S 2 5 N	1	台	H.10	525,000	個人	
	バーンクリーナー							
械	チェーン	パッツ	1	台	H.11	840,000	個人	
	タイヤショベル	T C M	1	台	H.11	4,200,000	個人	
	ウェルダー	新ダイワ	1	台	H.11	525,000	個人	
	ユンボ	コマツ	1	台	H.12	2,000,000	個人	
	ダンプ	イスズ4 t	1	台	H.12	2,500,000	個人	

6) 経営の推移

年次	作目構成	頭数	経営および活動の推移
昭和32年	酪農	経産牛1頭	父が長野県より乳牛1頭を導入した事が酪農経営の第一歩となった。
38年	"	経産牛15頭	当時としては莫大な資金（制度資金180万円）を借入、18頭牛舎を建設（頭数15頭）。また17PSのトラクターも購入し、小原牧場の本格的スタートとなった。
38年	"		中学を卒業と同時に就農
43年	"		当時としてはめずらしく青色申告を開始。大変几帳面であった父と一緒に決算に取り組んだ。現在の小原牧場の基礎となっている。
54年 ~55年	"	経産牛40頭 育成牛20頭 出荷乳量 300,000kg	近代化資金で畜舎の増築、バルククーラー、パイプラインの設置、バンクリーナーやトラクターを設備し、サイロも設置することで通年サイレージ体系を確立した。（経営主30才）
59年	"		大分県農業賞選考会優秀賞（県知事賞）、同じく第15回九州酪農青年婦人酪農経営発表会優秀賞受賞。
平成2年 ~ 3年	"	経産牛60頭 育成牛30頭 出荷乳量 450,000kg	育成牛舎を建設。 再び規模拡大（長男大学進学 後継者の確保ができた）省力管理の為に、パイプラインの更新、バンクリーナーの更新、キャビン付トラクター、ロールベラー、ラッピングマシンを導入し、スーダングラスに変え、ロールサイレージ体系とした。約20,000千円の資金は全て自己資金にて対応した。

年次	作目構成	頭数	経営および活動の推移
平成8年		経産牛70頭 育成牛40頭 出荷乳量 500,000kg	長男の就農を機に山香町家族経営協定に調印（労働報酬・就労条件を協定）。 防暑対策の為、細霧装置を設置。 子供達の給料分のために畜舎を増築。 経産牛1頭当たり年間産乳量が8,000kgを超える。 乾乳舎（15頭）を増設。自己資金で対応。
12年			環境保全対応として堆肥盤(300m ² 、900m ³)を自己資金で建設。
13年			町並びに農協で運営する山香町堆肥センターが稼働し始める。当牧場も毎月、翌月の搬出計画を町に提出し、水分70%、持込料300円/tで牧場の堆肥盤より堆肥センターに持ち込みを行う。

7) 自給飼料の生産と利用状況

(平成12年1月～12月)

ほ場	地目	面積	所有区分	飼料作物の作付体系	10a当たり収量(kg)	総収量(kg)	主な利用形態
高橋	畑田	150a	自己	スーダン	4,680	117,000	ロールサイレージ
		100a		イタリアン	4,300	107,500	
鶴田	畑	250a	自己	スーダン	4,560	114,000	ロールサイレージ
				イタリアン	4,240	106,000	
岩尾	畑	180a	借地	スーダン	4,500	81,000	ロールサイレージ (一部は乾草)
				イタリアン	4,200	75,600	
目久保	畑	240a	自己(1/2)	〔スーダン イタリアン〕	4,500	108,000	ロールサイレージ (一部は乾草)
			借地(1/2)		4,200	100,800	
スヶ原	畑	140a	自己	スーダン	4,550	63,700	ロールサイレージ (一部は乾草)
				イタリアン	4,250	59,500	
大田	田	90a	自己	スーダン	4,560	41,040	ロールサイレージ
				イタリアン	4,230	38,070	

8) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績

期 間		12年 1月～12月		経営実績	畜産会指標
経営 の 概 要	労働力員数 (畜産)	家 族(人)		3.5	
		雇 用(人)		0.4	
	経産牛平均飼養頭数(頭)			79.9	
	飼料生産用地延べ面積(a)			2,300	
	年間総産乳量(kg)			763,464	
	年間総販売乳量(kg)			760,296	
	年間子牛・育成牛販売頭数(頭)			55	
年間肥育牛販売頭数(頭)			0		
収 入	酪農部門年間総所得(千円)			30,764	
	経産牛1頭当たり年間所得(円)			385,027	220,000
	所 得 率(%)			36.1	25.0
益 性	経 産 牛 1 頭 当 た り	部門収入(円)		1,065,421	
		うち牛乳販売収入(円)		1,005,575	
		売上原価(円)		686,715	
		うち購入飼料費(円)		393,866	
		うち労 働 費(円)		100,936	
		うち減価償却費(円)		99,222	
生 産 性	牛 乳 生 産	経産牛1頭当たり年間産乳量(kg)		9,555	8,000
		平均分娩間隔(カ月)		13.9	13.0
		受胎に要した種付け回数(回)		1.2	1.5
		牛乳1kg当たり平均価格(円)		105.24	
		乳脂率(%)		3.94	3.5
		無脂乳固形分率(%)		8.60	8.3
		体細胞数(万個/ml)		2.62	20.0
		細菌数(万個/ml)		1.55	20.0
	粗 飼 料	経産牛1頭当たり飼料生産延べ面積(a)		29	20
		借入地依存率(%)		26.1	
飼料TDN自給率(%)			40.8	35	
乳飼比(育成・その他含む)(%)			39.2	35	
経産牛1頭当たり投下労働時間(時間)			91.8	115	
安 全 性	総借入金残高(期末時)(万円)			45	
	経産牛1頭当たり借入金残高(期末時)(円)			5,687	
	経産牛1頭当たり年間借入金償還負担額(円)			2,994	

(2) 技術等の概要

経営類型	耕地依存型
畜舎様式	つなぎ式
搾乳方式	パイプライン方式
自家配合の実施（TMRの実施）	あり
共同育成牧場の活用の有無	あり
採食を伴う放牧の実施	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器等共同利用の実施	なし
牛群検定事業への参加の有無	全頭参加
生産部門以外の取り組み	なし
E Tの活用	あり
F ₁ 生産	あり
肥育部門の実施	なし

3 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

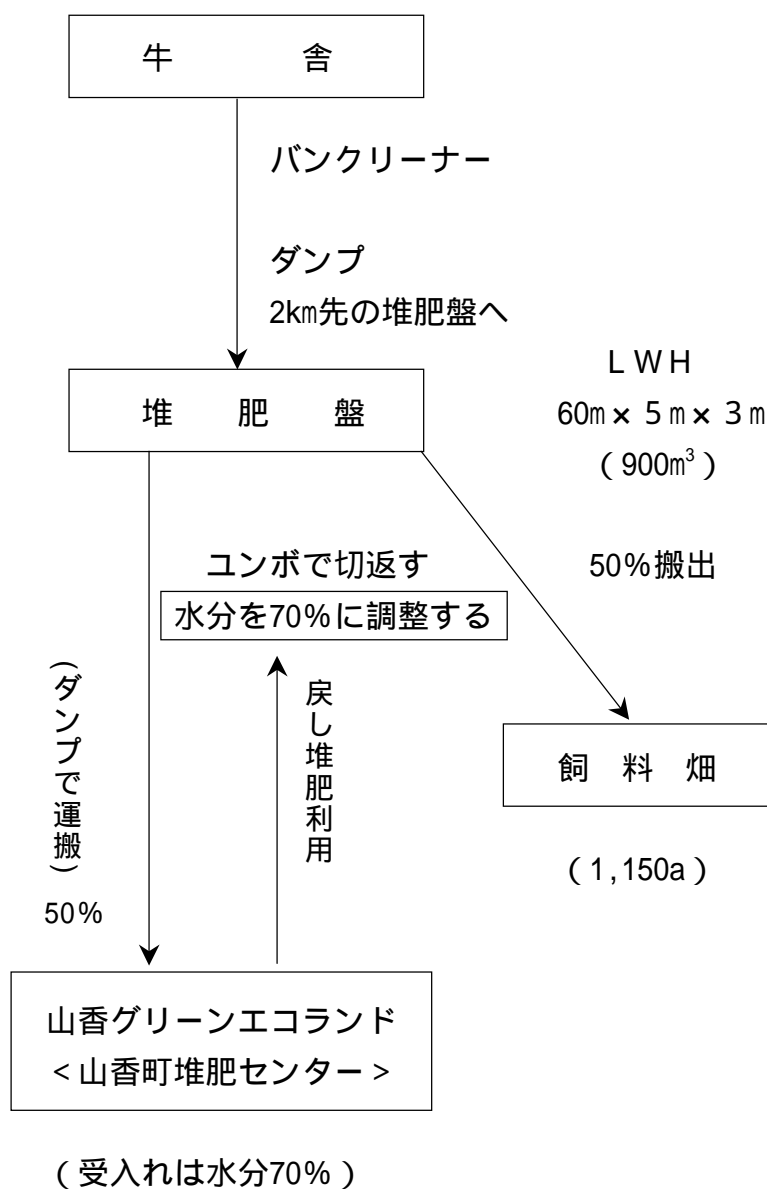
1) 家畜排せつ物の処理方法

つなぎ式の牛舎でバンクリーナー（中にオガコを敷き込む）で搬出し、2 km離れた堆肥盤へ毎日運んでいる。

堆肥盤（小原方式）は900m³の容積を持ち、長さ60m幅5 m深さ3 mで地中に埋設され可動式屋根を持つ。切り返しをユンボで行う独自の処理方法を行っている。3～4カ月間で70%まで水分をおとした堆肥を町と農協の運営（社団法人山香町地域活性化センター）する山香町グリーンエコランド（山香町堆肥センター）へ搬出している。

堆肥センターは、翌月の搬入計画を町に提出し、水分調整した堆肥は、300円/トンで搬入する。また、堆肥センターの堆肥の再利用を戻し分と、飼料畑への還元を計画している。

（処理フロー）



2) 家畜排せつ物の利活用

(1) 固形分

内 容	割合 (%)	品質等 (堆肥化に要する期間等)
販 売	50	山香町堆肥センターへ搬入
交 換		
無償譲渡		
自家利用	50	飼料畑へ堆肥盤より還元する
そ の 他		

(2) 液体分

内 容	割合 (%)	浄化の程度等
土地還元	100	飼料畑へ還元する
放 流		
洗 浄 水		
そ の 他		

3) 評価と課題

(1) 処理・利活用に関する評価

これまでの堆肥は、完熟な堆肥でないままに飼料畑に還元をしていたが、今年、町の堆肥センターが稼働を始めたことで、良質の堆肥を還元できる。また、副資材として大鋸屑の代わりに戻し堆肥としての利用も可能となる。

(2) 課 題

町・農協堆肥センターの運営について、町の酪農組合長として、地域の農家の取りまとめ役として、町、農協等と連携を取り、よりよい運営をしていくことである。

4) その他

畜舎周辺には、夫人や嫁さんの手により季節の花が植えられていたり、牧場の入口には手作りの看板を設置している。

また、牧場背後の高台にはロールがいつもきれいに並べてあり「ロールをきれいに並べてある牧場」としても有名である。

4 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

山香町酪農組合組合長として地域の各種活動やとりまとめ役として活躍している。組合として地域に牛乳拡売運動等を行い、自分達の牛乳のPRも忘れていない。

また、町外の仲間との交流会として、畜産研究会を月1回、外部講師を招き各農家を巡回し、勉強会も実施したり改良同志会への参加も積極的に行っている。

地域へのつながりは高齢化の中、遊休地の活用を目的として土地を借り受け、飼料作物作りで、地域への貢献をしている。

5 後継者確保・人材育成等と経営の継続性に関する取り組み

父の酪農に対する姿勢と安定的に確実に規模が拡大され儲かっている姿を見ている長男は、迷わず酪農学園大学に進学。

また、「今、会話のない家庭があると聞くと、酪農を職業としているからこそ我が家は親子の会話も当たり前で、良い職業だと思える」と、夫人は言う。

小原牧場の後継者は確実につぎに続くの自分の酪農経営を夢見ている。

6 今後の目指す方向と課題

循環型農業で高い生産力を目指す方向性は変わらないが三代目の長男（後継者）が継承する頃は九販連（九州生乳販売農業協同組合連合会）とはいえ、本県の乳価が下落していることは確実であり、少なくとも200頭規模のフリーストール・ミルクパーラー（搾乳ロボット）方式への転換も視野に入れている。

また、近くに大分県農業文化公園が12年4月にオープンし、休日には小原牧場前の道路は急激に交通量が増え、このことが小原ブランドの乳製品販売へのチャンスを早め、色々な検討が今なされている。

長男はインターネットを開始しており、今回の発表を機に酪農データベースの活用も目指したいとのこと。また、経理についても飼養管理技術同様に両親の技術を早く習得してパソコンで管理を行いたい。

平成8年に町の家族協定を結んでいるが、現在では所得30,000千円以上あげており、今年中には法人に移行する為、家族での検討を行い実施する予定である。

将来に向けて、各種条件をクリアしていく必要があるが、ここまで築き上げられたこの牧場『本物の酪農経営』を三代目に確実に継承していくことこそ、自分に課せられた使命である。